

所蔵瓦からみる古代影向寺と武蔵国橘樹地域（2）

法政大学第二高等学校 社会科学・歴史研究部

3年 浦沼凌生・武藤忠英

2年 小森 智

1年 村本 悠・山邊拓実

論文要旨

「橘樹官衙遺跡群」は、古代における武蔵国橘樹郡を治めていた役所・橘樹郡家遺跡と影向寺遺跡から構成され、神奈川県川崎市の中部に位置している。影向寺は、南武蔵最古の古刹で、中世に一度廃れかけたが江戸時代には名所にもなっており、現存するお寺である。私たちは、昨年度から部が所蔵する影向寺の瓦について整理・分類を行っている。今回は、瓦を生産していた2つの窯跡と影向寺の関係について、そして同じ窯跡の瓦が出土する武蔵国分寺との関係について、地理的な観点から検討をおこなった。

古代影向寺の瓦を生産していた瓦窯は、初期が三輪瓦窯、修復期が南多摩窯跡群だと推定されている。武蔵国分寺跡で出土する瓦を、最も大規模に生産していたのが南多摩窯跡群である。その中でも私たちは南多摩窯跡群大丸地区のNo.513遺跡に注目して、武蔵国分寺瓦と影向寺瓦の比較をおこなった。そして本校が所蔵する影向寺の縄タタキの平瓦は、南多摩窯跡産とされる国分寺の平瓦と同一工房のものだと考えた。また、三・四重弧文が確認でき、南多摩窯跡群の瓦が供給されているということもわかった。

次に影向寺に瓦を供給していた窯跡について、地理的な視点から分析をおこなった。三輪瓦窯は、都筑郡に位置し、近くに鶴見川がある。鶴見川に沿って位置する岡上廃寺や郡を超えて位置する弘明寺、三輪巖嶋神社からは三輪瓦窯の瓦が確認されている。このことから、私たちは三輪瓦窯産の瓦が河川に沿う形で供給されているのではないかと考えた。特に、多摩地域と隣接する荏原郡は、影向寺創建の際に連携があったことが文字瓦から伺えることから、影向寺の信仰圏が橘樹郡を越えた広い空間に広がっていたことを指摘した。

南多摩窯跡群は、武蔵国府・国分寺造営のために設置された窯跡であり、影向寺からの出土例は三輪瓦窯に比べると非常に少なく、影向寺修復期に供給された瓦と考えられている。そこで私たちは、影向寺が国分寺系窯から瓦を供給されていることの意味について、供給する／される国府と寺の双方の立場から考察した。

最後に、影向寺の地理的分析をおこなった。周辺には水運に関する地名が残っている他に、古代の東海道の駅にまつわる地名が見られる。また、橘樹官衙遺跡群は多摩丘陵の上に位置し、その先には多摩川によって形成された低地が広がっている。これらのことから、影向寺は単なる地域の寺院ではなく、水運・陸運の交通の結節点にある地域統合の象徴だったと結論づけた。

I. はじめに

私たちの部では、「高校生の視点で地域の歴史を掘り起こす」というテーマのもと調査・研究を行っている。私たちの通う法政二高は、戦前より川崎市に所在しており、地域との関係も深い。前身の同好会が1952年に創設されて以来、地元川崎市の歴史について調査活動を行っている。今までもその視点をテーマに、中世城郭や旧日本陸軍の秘密研究所などを研究してきた。

今年度も昨年度に続き、法政二高が所蔵する影向寺出土遺物の分析から古代の南武蔵について考えてみたい。

所蔵している遺物は、私たちの部のOBが表面採集したもので、昨年私たちが調査を始めるまでおよそ50年間調査されずに放置されてきた（【資料1】）。私たちはこれまで、瓦の整理と分類をおこない、調査報告としてまとめた¹。そして昨年度の影向寺瓦の分析から、影向寺に武蔵国分寺の瓦が供給されていたことが分かった。そこで、今回は影向寺の瓦と武蔵国分寺の瓦を比較し、周辺地域との関係から、橘樹地域の特性を明らかにしたいと考える。

【資料1】



II. 橘樹官衙遺跡群と影向寺の概要

II-1 橘樹官衙遺跡群と影向寺

橘樹官衙遺跡群とは、古代における武蔵国橘樹郡（川崎市に相当する場所）を治めていた役所である橘樹郡家遺跡と、その遺跡に隣接し関係が深い影向寺遺跡から構成され、川崎市の中部に位置している（【資料2】）。また、多摩丘陵上に位置しているため、東側に多摩川によって形成された沖積低地と多摩川を見下ろすことができる。低地と遺跡群の位置する多摩丘陵との標高差は30mもあることから、この場所では周辺一帯を臨むことができる。この遺跡群は2015年に川崎市で初めて国史

【資料2】 橘樹官衙遺跡群の立地



(Google EarthProに加筆)

【資料3】 橋樹官衙遺跡・影向寺遺跡と周辺遺跡



(国土地理院地図より作成)

跡に指定され、2024年には全国初の飛鳥時代の正倉が復元された。

影向寺とは、南武蔵最古の古刹で、中世に一度廃れかけたが、江戸時代に再興している。現代の本堂は江戸初期のものである。寺の由来となった「影向石」は霊石とされ、視力回復に関する伝説がある。1710（宝永7）年の『影向寺仮名縁起』によると、奈良時代の740（天平12）年に聖武天皇の命を受けた僧行基によって開創されたと伝えるが、川崎市教育委員会による発掘調査によって、創建時期は白鳳期まで遡ることが明らかになっている。また江戸時代の文化・文政年間に編さんされた武蔵国の地誌『新編武蔵国風土記稿』には「今モ近邊ノ土中ヨリ古瓦ヲ得ルコト多シ」とあり、影向寺の周囲では江戸時代より古瓦が見つかることがわかる。発掘調査では、縄文時代から古墳時代までの建造物跡が確認され、大型の掘出柱建物・金堂跡などの施設があったことがわかり、8世紀前半には少なくとも13棟の総柱建物が造られ、9世紀中頃には廃絶していることから、評と郡の正倉の構造の違いや、本格的な郡家へと整えられていく様子がうかがうことができる。

化・文政年間に編さんされた武蔵国の地誌『新編武蔵国風土記稿』には「今モ近邊ノ土中ヨリ古瓦ヲ得ルコト多シ」とあり、影向寺の周囲では江戸時代より古瓦が見つかることがわかる。発掘調査では、縄文時代から古墳時代までの建造物跡が確認され、大型の掘出柱建物・金堂跡などの施設があったことがわかり、8世紀前半には少なくとも13棟の総柱建物が造られ、9世紀中頃には廃絶していることから、評と郡の正倉の構造の違いや、本格的な郡家へと整えられていく様子がうかがうことができる。

II-2 文献からみる橋樹官衙遺跡群

「橋樹官衙遺跡群」のある「橋樹」という地域は、安閑天皇元年（534年）閏十二月、笠原直使主（かさはらのあたいおみ）と同族の小杵（おき）が武蔵国造の地位を争った武蔵国造の乱がおこったという（『日本書紀』巻第十八）。朝廷の援助を受けて争いに勝利した笠原直使主は、その礼として横渟屯倉、橘花屯倉、多氷屯倉、倉櫟屯倉を献上したとされる。橘花屯倉は「たちばな」という読み方により、武蔵国橋樹郡に所在していたとみるのが通説となっている²。この説が正しいとすると、橋樹地域は武蔵国造の乱後の6世紀にはすでにヤマト王権と関係を持っていたことがわかる。

また、『万葉集』の755（天平勝宝7）年に詠まれた防人の歌には、「橋樹郡」という言葉が確認できる（巻20-4419・4420）。さらにこの歌には「上丁（かみつよほろ）物部真根」と「椋椅部（くらはしべ）」という人物の名が登場していることから、この地域に複数の氏族が存在していたことがわかる。この「上丁」という役職については、まだ議論が行われており、物部真根は農民の出身に過ぎないという説もある³。

さらに、同年代の史料として正倉院に現存する調庸布には、「刑部直国当」と「郡司領外従七位下刑部直名虫」が記載されていることから、756（天平勝宝8）年には橘樹郡の郡領氏族は刑部直氏だったといわれている⁴。他にも『続日本紀』では、神護景雲2年（768年）に「橘樹郡」の飛鳥部吉志五百国という人物が白雉を献上したため位階を授けられたことも記述されている。この人物は渡来系の可能性が指摘されている。

このように複数の文献史料から、橘樹地域は6世紀ごろから中央政権との関わりをもち、律令制下の8世紀中頃には、物部、棕椅部、刑部、飛鳥部吉志という有力な氏族がいたことがわかる。

II-3 発掘調査と先行研究

① 川崎市による発掘調査

（橘樹官衙遺跡群1999～2013年、第1次調査～12次調査）

（影向寺遺跡1975～2013年、第13次調査まで）

次に橘樹官衙遺跡と影向寺の発掘についてまとめる。1970年代に入ると、影向寺周辺地域で宅地化の風潮が出てきた。そのため、埋蔵文化財の保護の観点から、長い間発掘調査が行われてこなかった影向寺においても発掘調査が行われることとなった。こうして1975年、影向寺北側の畑地で宅地造成工事に先立つ発掘調査が行われた。この調査から始まり現在に至るまで、発掘調査は続いて行われている。川崎市の発掘調査によって、影向寺は大きく7期の変遷をたどることがわかった。発掘調査によって明らかになったことを以下の表にまとめた。

【資料4】影向寺の時代変遷（川崎市教育委員会のHP・川崎市パンフレットより作成）

<p>第1期（7世紀中葉～後葉） 橘樹「評」段階期 古代影向寺の創建に先立ち建設された建物群。寺院関連施設ではなく、橘樹郡家に先行する橘樹評家に関連する施設、もしくは地元有力氏族の居宅であると推測される 【建物】 大型の掘立柱建物跡2棟（建物主軸方位が西に約40度傾いている） 【その他】 瓦は出土していない</p>
<p>第2期（7世紀後葉～8世紀初頭） 影向寺創建期 推定金堂に山田寺系の素弁八葉蓮華文軒丸瓦が葺かれた時期。寺院地の整地工事などが進められる 【建物】 推定金堂（総瓦葺建物。現在の薬師堂とほぼ同じ場所） 【その他】 「无射志国荏原評」の文字瓦が出土</p>
<p>第3期（8世紀前葉） 整備期① 【建物】 金堂の南東側に棟、周辺に数棟の掘立柱建物（2期から継続して造営の可能性もある）</p>
<p>第4期（8世紀中葉・武蔵国分寺創建前後） 整備期② 堂塔をもつ寺院は周辺に認められず。影向寺がこの地域の中核的な寺院の役割をはたしていた 【建物】 金堂が改装（現在の薬師堂とほぼ同じ場所で金堂を再建か）。他の寺院関係施設も整備</p>

第5期（8世紀後葉） 安定期①

武蔵国府が管理する南多摩窯跡群で製作された瓦が出土しており、武蔵国府との深い関係性がうかがえる。この時期の瓦の出土量は非常に少ないことから補修に使用されたものと考えられる。

【建物】 縄タタキの粘土紐作り平瓦（国衙系瓦屋）の建物。新たに造営された建物は確認されず

第6期（9世紀前葉～中葉） 安定期②

【建物】 推定金堂（第5期の建物が踏襲されたと推測される）

【その他】 この時期の建物跡や瓦は発見されていなく、不明な点が多い

第7期（9世紀後葉～10世紀初頭） 補修・衰退期

第6期には見られなかった国衙系の瓦窯（南多摩窯跡群）から再び瓦が供給される。

878（天慶2）年9月29日の「相模・武蔵地震」で被災した伽藍建物の復旧のためと考えられている

【建物】 縄タタキの粘土版作り平瓦（国衙系瓦屋）の建物、金堂、塔、竪穴住居数棟が確認

複数の調査で橘樹官衙遺跡からは正倉の遺構が出土したほか、十数棟の建物跡、刀や硯が出土している。また、創建期以前の第1期には大型の掘立柱建物跡2棟が検出されていることから、影向寺創建以前から機能していたことがわかる。影向寺創建期の第2期（7世紀後葉～8世紀初頭）には「无射志国荏原評」と記された文字瓦が出土していることから、律令以前からこの地が地域の中心的な場所であったということが伺える。これらのことから、この地域は官衙という行政施設と寺という宗教施設が密接に関わるかたちで存在し、地域を統治していたことがわかる。

② 考古学による研究

影向寺の研究の先がけとなるのは、1922年から翌年にかけて三輪善之助と谷川磐雄によって発表された論文である。谷川は、影向寺の平瓦の中から「都」と書かれた瓦（【資料5】）を発見し、この瓦は、隣接する都筑郡のものであると考察した⁵。また三輪は、霊石の伝説を伝える影向寺石は、本来は影向寺の礎石であるという説を唱え、谷川もこれに賛同している。

【資料5】「都」と書かれた瓦



その後、研究が進展したのは、1945～1955年代の古江亮仁の研究がある。古江は『川崎市史』において、影向寺が郡寺である可能性を述べたが、当時は研究者から注目を集めることはなかった。1991年に坂詰秀一によって評価がなされたことにより、古江の考察は注目されるようになった⁶。

その後、村田文夫、栗田一生らによる研究の積み重ねや、シンポジウム『橘花屯倉ミニシンポジウム—橘樹官衙遺跡群成立の前段階—』をまとめた『歴史評論』No.895号など、考古学や文献史学から最新の研究成果が蓄積されている。

Ⅲ. 法政二高所蔵瓦について

Ⅲ-1 瓦の分類と製法

私たちは昨年に法政二高が所蔵する影向寺瓦の整理を行った。整理にあたっては武蔵大学の石井龍太教授、

【資料6】瓦の分類

種類	軒丸瓦	軒先瓦	丸瓦	平瓦	測定不能	合計
個数	0	6	2	319	19	346

川崎市教育委員会の栗田一生さん、石井一樹さん、専修大学小林孝秀准教授と考古学ゼミの皆様にご教示をいただいた。【資料6】は私たちが瓦を分類してまとめた表である。

表から読み取れることとして、平瓦が最も多く319片とほとんどを占めていることがあげられる。次いで軒先瓦、丸瓦の順で、軒丸瓦は見つかっていない。屋根に葺かれる瓦の量は、丸瓦に比べて平瓦の方が量は多いため、所蔵遺物においても同様に平瓦が最も多くを占めている。

次に瓦の作り方をみると、2種類の製法が確認された。桶巻作りと一枚作りの2種類である。桶巻作りは朝鮮半島から伝来し、6～8世紀に主に使われていた瓦の製作製法である。桶巻作りには、瓦のへりの部分が内側に向くという特徴がある。これに対して一枚作りは、奈良時代に考案され、それ以降は主流となった製法で、桶巻作りとは異なり、へりが垂直になっている⁷。私たちはこの製法の違いに着目して、桶巻作りか一枚作りかを見分けて瓦の分類をおこなった。次の項で詳細に触れたい。

Ⅲ-2 平瓦のタタキによる分類

平瓦に注目してみると、瓦の凸面に文様が施されていることがわかる。この文様の事をタタキという。【資料7】

【資料7】平瓦のタタキによる分類

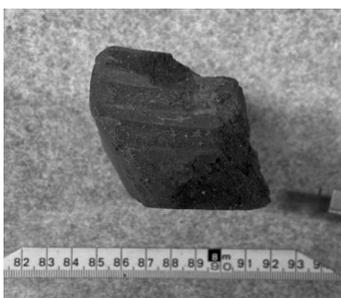
タタキ	斜格子	正格子	縄目	ナデ	凸面布目	合計
個数	100	12	11	194	2	319

【資料7】は平瓦をタタキごとに分類したのをまとめた表である。表から、ナデが最も多く、次いで斜格子、正格子、縄目、凸面布目の順であることがわかる。ナデと斜格子の数は、他のタタキと比べると多い。

① 重弧文

軒先に設置される軒平瓦の種類の一つであり、一目につきやすい場所におかれるため、軒先に面する方にカーブを描いた文様（重弧文）が入っている（【資料8】）。重弧文は奈良時代からみられる文様

【資料8】重弧文の写真と拓本

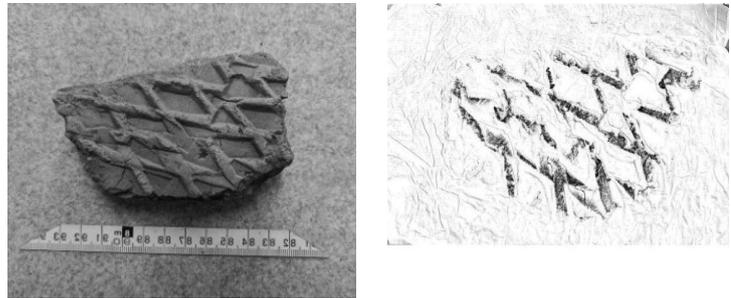


で、影向寺遺跡からは三重や四重、五重の重弧文が発見されている。法政二高が所蔵する瓦からも三重、四重弧文をみつけることができた。

② 斜格子

斜格子の数は全体で二番目に多く確認できた。多くは凹面が布目になっていて、分類の際で手掛かりとしたことは、凸面の格子によって作られる空間がひし形か正方形であるかどうかである。川崎市の報告書では、正格子や布目と共に、1型式（桶巻作り）に分類されている。斜格子は1B型に分類され、さらに格子の大きさによってa～dと4つに細分化される（【資料10】）。私たちの所蔵する瓦のなかから、1Ba型が16片、1Bb型が43片、1Bc型が30片、1Bd型が11片確認できた。

【資料9】斜格子の写真と拓本



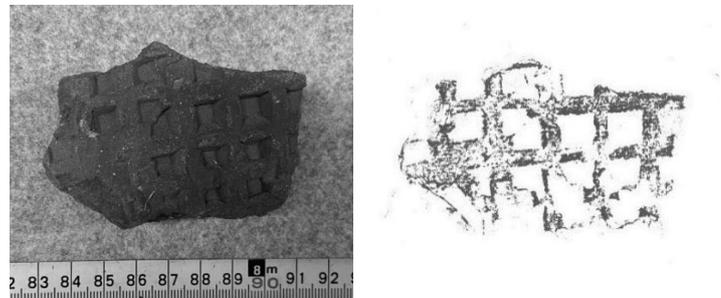
【資料10】格子の大きさによる川崎市の分類

1Aa型	1辺1cm程度。タタキ浅い。格子間非常に広い。
1Ab型	1辺0.5cm程度。格子間やや広い。
1Ac型	1辺0.8cm程度。格子間やや広い。
1Ad型	0.5×0.8cmの長方形。格子間やや狭い。
1Ba型	長軸3.3~3.5cm、短軸1.5~1.8cm程度
1Bb型	長軸2~2.6cm、短軸1~1.2cm程度
1Bc型	長軸1.2~1.5cm、短軸1cm程度
1Bd型	長軸0.6~0.8cm、短軸0.5cm程度

③ 正格子

正格子は、凸面の格子によって区切られた空間が正方形になっているものであり、時代・製法ともに斜格子と同様に桶巻作りで、6～8世紀の年代だと考えられている。川崎市の分類では1A型に分類され、格子の間隔によってa～dに細分化されている。

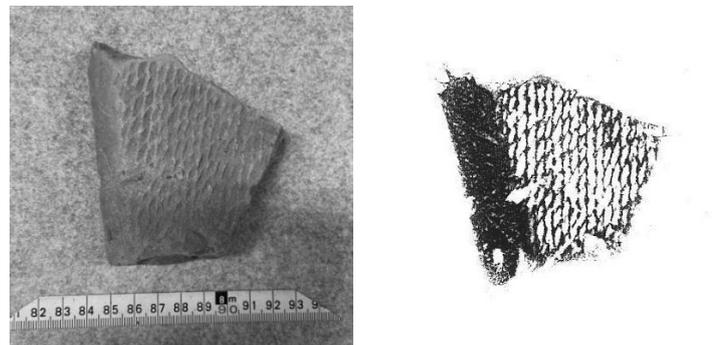
【資料11】正格子の写真と拓本



【資料12】縄目の写真と拓本

④ 縄目

縄目は、凸面に細い縄を転したことでついた文様がついたタタキであり、凹面は布目になっている。川崎市の報告書では2型に分類されており、更に粘土紐作りを2A、粘土板作りを2B、2Cと細分化される。作



り方は、逆薄鉢形の型に一つ一つ粘土をのせて成型する一枚作りの製法である。国分寺造営の際に全国に広がった製法で、古代影向寺の造営時期より後の時代のものと考えられている⁸。【資料12】の瓦は、側面が垂直なため、一枚作りの製法で作られたと考えられる。

影向寺から出土する瓦のなかで、一枚作りは桶巻作りの瓦と比べると出土数が少ないため、この瓦は寺の補修用の瓦だったのではないかと推測されている⁹。瓦の縄タタキの文様や色調が武蔵国分寺造営の際に瓦を供出した南多摩窯跡群跡産の瓦と似ていることから、そこで生産されたものと考えられる。

⑤ 無文

この瓦は、凸面にはなにもタタキがないナデ（無文）であり、凹面に布目があるだけの瓦である。製法は桶巻作りであり、桶巻作りの中でも一番数が多い。

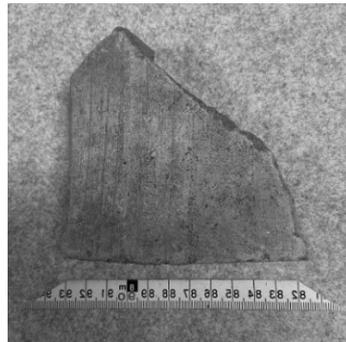
凸面に模様がついていない理由としては、凹凸がついていないタタキを利用していたか、格子文か何かしらの模様を付けた後にヘラで慣らし

ていたと考えられる。瓦の凸面を叩いていないとなると、内部の空気が抜けず焼く際に手間が増えるため、叩かずにそのまま焼いたとは考えにくい。

無文の中でも多くの種類の瓦の布目が凹面にあるのに対して、凸面布目は布目が凸面に出ている瓦のことである（【資料13】）。川崎市の報告書では3型に分類されており、見つかった量が少なく珍しいもので、7世紀後半～8世紀初頭の白鳳期に限定されるといわれている。桶巻作りが桶の外側に布を巻くのに対して、布を内側に巻いて更にその内側に粘土を貼り付ける「桶型内巻き作り」という製法や、前述した一枚作りの型を凹の字にするやり方で作られている。しかし、事例が少ないためどちらかの手法かは分からない。

法政二高所蔵の遺物の平瓦をタタキごとに見ると、瓦の作り方の製法である桶巻作り、一枚作りのどちらも確認することができた。縄タタキを見ると、影向寺遺物の中では少ない製法である一枚作りを確認することができ、川崎市の報告書で指摘されるように一枚作りの縄タタキは補修用の瓦だった可能性がある。また、凸面布目が確認できたことから、影向寺創建期からの瓦が保管されていたことがわかった。

【資料13】 凸面布目の写真と拓本



II-3 影向寺出土瓦の産地

古代影向寺の瓦を生産した瓦窯は、初期が三輪瓦窯跡、修復期が南多摩窯跡群だと推定されている¹⁰。瓦窯の位置と影向寺の位置は【資料14】の地図にまとめたとおりである。影向寺の周辺には鶴見川、矢上川、多摩川といった河川があり、多摩川の上流には南多摩窯跡群が位置している。

南多摩窯跡群は、東京都町田市・八王子市・稲城市など5つの市にまたがる窯

跡で、奈良・平安時代の瓦と須恵器を生産している。200基を超えた登り窯が確認され、多摩丘陵の東西十七キロ、南北七キロの範囲に広がる広大な窯跡群である。その中でも今回私たちの研究で着目しているのは大丸地区のNo.513遺跡とよばれる窯跡である。

【資料14】 影向寺瓦の瓦窯の立地



(Google Earth Proに加筆)

IV. 武蔵国分寺瓦と影向寺瓦

IV-1 武蔵国分寺と国分寺瓦について

東京都国分寺市に位置する武蔵国分寺は、発掘調査の回数が多く、発掘の際に瓦が多く出土している。出土した瓦は種類も多く、その瓦を生産した瓦窯跡が複数存在することも判明している¹¹。また、武蔵国分寺の研究自体も数多く報告されている。

武蔵国分寺の屋根瓦を生産した主要な窯跡には、埼玉県寄居町付近の末野窯跡群、比企郡鳩山町の南比企窯跡群、入間市の東金子窯跡群、そして八王子・町田・稲城市にまたがる南多摩窯跡群などがある。国分寺市によると、出土した瓦の分析から、国分寺創建時は主に比企郡と多摩軍郡の窯業地で生産された瓦が使用され、創建期の瓦の約8割は比企郡鳩山町の南比企窯跡群で生産されたという¹²。

最も大規模に生産していたのは、南多摩窯跡群の中でも国分寺に近接していた大丸地区の窯だったと考えられている。また、同じ大丸地区のNo.513遺跡は、瓦の一大生産地であったことが明らかになっているが、そこから出土した瓦のなかに、瓦窯の所在地である多摩郡を表すと考えられる「多」の文字が多く見ついている。さらに「榛(榛沢郡)」「児(児玉郡)」「高(高麗郡)」「那(那珂)郡」など、他の郡名と考えられる文字瓦も見つって

いることから、「都」の文字瓦は都築の郡名を指すものと考えられている。

法政二高が所蔵する遺物のなかには、影響寺のほかにも武蔵国分寺の遺物があった。おそらく影響寺の瓦を調査したかつてのOBたちも、私たちと同様に武蔵国分寺との関係に着目して瓦を収集したのではないだろうか。武蔵国分寺の遺物は、影響寺に比べると多くないものの、影響寺の遺物の中には見られない格子のタタキを持つ平瓦が確認でき、他にも瓦窯の特定につながる縄目のタタキを持つ平瓦も確認できた。

Ⅳ―2 武蔵国分寺瓦と影響寺瓦の比較

① 本調査の分析の視点

国分寺市教育委員会の発掘調査によると、南多摩窯跡群産の瓦、須恵器などが武蔵国分寺に供給されている¹³。影響寺では、補修用として南多摩窯跡群産の瓦が確認されている¹⁴。竹花宏之氏によると、No.513遺跡は軒丸瓦、三重、三重弧文などの軒丸瓦を生産していたという¹⁵。さらに、川崎市教育委員会の報告書では、No.513遺跡は影響寺に軒丸瓦を供給する瓦窯だったという¹⁶。これらから、私たちは影響寺に軒丸瓦を供給しているのならば、軒平瓦も供給している

のではないかと仮説を立てた。そして、所蔵する武蔵国分寺瓦と影響寺瓦の二つの瓦が同一の瓦窯で生産されたものであるかどうかを確かめるため、武蔵国分寺瓦と影響寺瓦を比較することにした。また、影響寺瓦とNo.513遺跡との関係があるかどうかを調べるために、ここで生産されたと考えられている三重・三重弧文を見つけることとした。

② 法政二高所蔵の瓦との比較分析

比較手順として、影響寺に供給された平瓦は縄タタキの一枚作りであることが、川崎市教育委員会の報告で判明しているため、武蔵国分寺、影響寺瓦の中からそれぞれ縄タタキの平瓦を抽出し、それらを比較した（左が武蔵国分寺瓦、右が影響寺瓦である）。【資料16】から武蔵国分寺瓦（左）と影響寺瓦（右）はヘリが垂直なため、製法が一枚作りとわ

【資料15】南多摩窯跡群の周辺地図



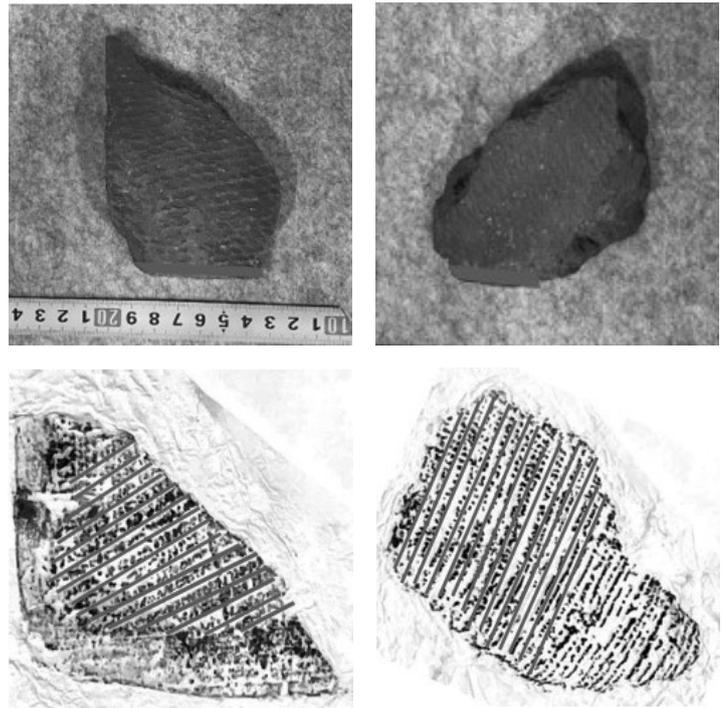
第1図 南多摩窯跡群と周辺遺跡 (竹花2019, p.118に加筆)

かる。瓦の拓本をとってみると、瓦の裏面には、瓦を造る際に板と瓦の間に布を挟むため、布目がある。二つの拓本を見比べると両方の布目に線が見られ、ほかの平瓦を探してもこの二つだけに見られる特徴であった。このことから、私たちはこの瓦二つが同一の工房で作られたものではないかと考えた。

次に法政二高所蔵の重弧文について、武蔵国分寺瓦からは検出することができなかったが、影向寺瓦の中からは合計で八点の重弧文が確認できた。その中には三重・四重弧文も認められた（以下左が三重弧文、右が四重弧文である）。竹花宏之氏と

川崎市の先行研究から、これらの軒平瓦はNo. 513遺跡で生産されたものだと考えられる。

【資料16】 武蔵国分寺瓦（左）と影向寺瓦（右）



【資料17】 重弧文の写真と拓本（左が三重弧文、右が四重弧文）



④ 比較からわかったこと

影向寺瓦と武蔵国分寺瓦の縄タタキの平瓦の製法が一枚作りであること、布目に線が見られるということから、同じ窯で作られた瓦は影向寺と武蔵国分寺に供給されていることが指摘できる。そして、国分寺クラスに供給される瓦が影向寺にも供給されるということは、影向寺はただの一地域レベルの寺ではないことがいえる。武蔵国分寺より下位であるはずの影向寺が国分寺と同じ瓦を葺くことを認められるには理由があるはずである。

V. 考察－古代南武蔵地域における影向寺の特性－

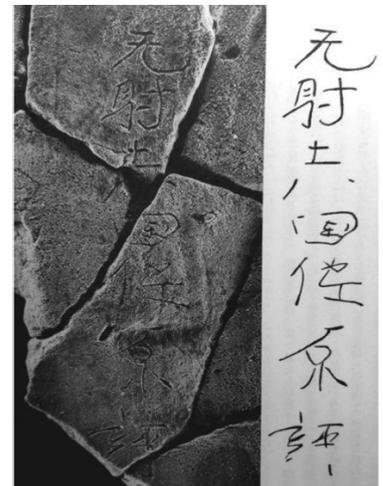
V-1 水運から考える影向寺瓦について

【資料18】影向寺遺跡と周辺河川



(国土地理院地図に加筆)

【資料19】「无射志国荏原評」
の文字瓦



(村田文夫2016より引用)

この時代の瓦の流通としては、船や筏を使った水運と背負子や馬による陸運の二つが考えられる。影向寺に瓦がどのように供給されたのか、今回は水運に焦点を当てて考察したい。影向寺の創建期 7世紀後半の瓦を生産していた三輪瓦窯は、7世紀末～8世紀前期にかけて橘樹郡の西南部の都筑郡に位置する瓦窯であり、登り窯で構成されている。この窯から500m離れたところに鶴見川があり、その近くに岡上廃寺が位置する。岡上廃寺からは、三輪瓦窯で作られた瓦が報告されている¹⁷。三輪瓦窯で生産された瓦は影向寺と岡上廃寺以外にも各地で発見されており、郡を超えて久良郡の弘明寺や荏原郡の三輪巖鳴神社からも確認されている¹⁸。これらの出土地に共通することは、それぞれが当時の河川に沿って、または河口に近接して位置しているという点である。したがって、三輪瓦窯で生産された瓦は、鶴見川という河川を利用して運ばれ、各地に供給されたことが考えられる。このことから、7世紀後半の武蔵国における三輪瓦窯とは、橘樹、久良、荏原、都筑という4つの郡にまたがって供給する地域レベルの窯であったと見ることができる。この中でも、橘樹郡と荏原郡は特に関係が深いことが指摘されている。発掘調査で三輪瓦窯から影向寺に供給された瓦のなかに「无射志国荏原評」とヘラを使用して記されたものが見つかるからである¹⁹。「无射志国」は他の記録にも残されている文字で、読み方からわかるとおり「武蔵国」のことを指している。「荏原評」というのは多摩川を挟んだ対岸の地名である。「无射志国荏原評」の文字瓦が7世紀後半～8世紀初頭に推定されている影向寺創建期（第2期）から出土していることから、影向寺創建の際、多摩川を挟んだ荏原郡からも寄進がおこなわれていたということが指摘できる。このことは、単に当時の橘樹

郡と荏原郡の間に同じ瓦が供給されているということだけではなく、影向寺の信仰圏が橘樹郡を超えて広がっていること、そのつながりによって影向寺が支えられていたことが推察される。三舟隆之は、これを「在地の豪族衆の連携による私的な労働力編成」とし、「仏教的結縁行為」と推測している²⁰。

V-2 武蔵国府と国分寺、影向寺の関係

また、影向寺の修復期の瓦を生産していた南多摩窯跡群は、武蔵国府・国分寺造営のために設置された窯であり、同範瓦は三輪瓦窯と比べると非常に少ない。影向寺に軒丸瓦を供給しているNo.513遺跡産の瓦は、武蔵国府・国分寺、少し時代が下って川崎市多摩区にある菅寺尾廃寺がある²¹。



(国土地理院地図に加筆)

武蔵国府・国分寺という中央との関係の深いところで使用された瓦が、なぜ影向寺に供給されたのだろうか。ここではその意義について考察していく。修復期に供給された瓦は、確認される数も少なく、これまで生産された瓦とタタキや文様が変わっている。国分寺瓦と影向寺瓦の比較検討からも、影向寺が国分寺系統の窯から瓦を受け取っているということを指摘した。これらが意味することは、武蔵国分寺という格式の高い寺が、南武蔵地域の単なる一寺院である影向寺に対して援助する関係にあったということである。また、影向寺自体も南武蔵地域で唯一の白鳳寺院であり、南武蔵地域の中核を担っていた。こうした武蔵国分寺と影向寺の双方の立場上、国分寺瓦の供給をすること、受けることには一定のメリットがあったため供給関係が成り立っていたと考えられる。それは、武蔵国を支配するにあたって、国府創建以前から地域支配の拠点だった影向寺側に権威を見せつけたい国府側と、中央との関係を自らの後ろ盾として権威を示したい影向寺の両者の利害が一致したということではないだろうか。

V-3 地名から考える古代影向寺の位置

次に、南武蔵における交通から影向寺について考えてみたい。橘樹官衙遺跡群周辺をみると、遺跡を囲むように矢上川とそれに接続する江川、その先に多摩川、それらの河川をつなぐように7世紀頃は伝路と推定されている古代の東海道が通っている。そして、

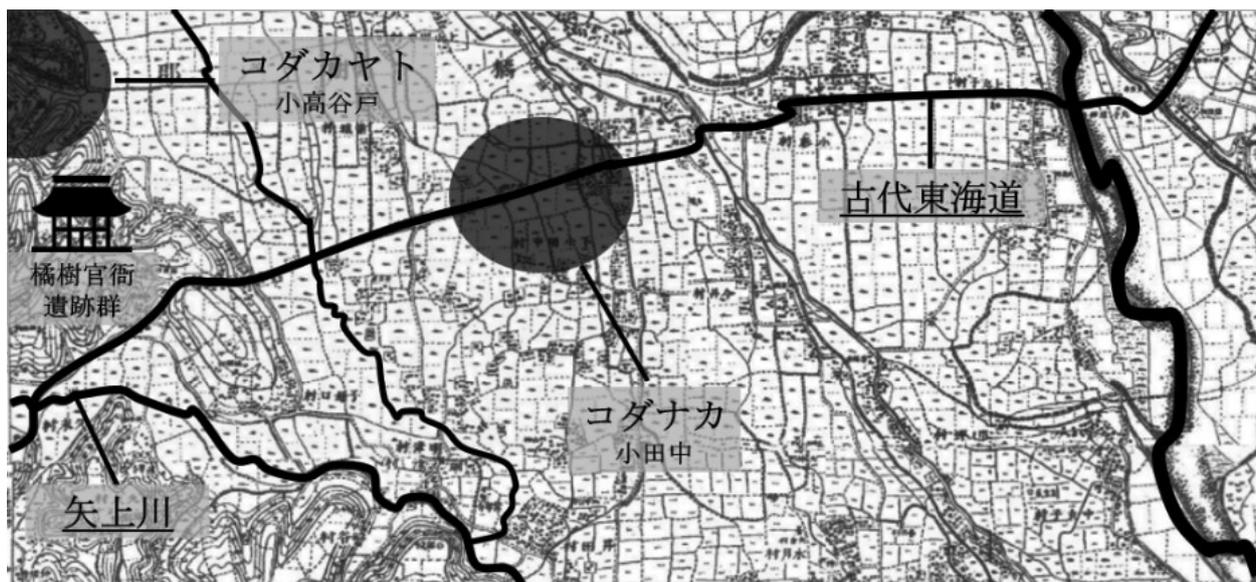
この周辺には、遺跡東部の江川に沿って、南からアクツ（明津）、フナガワラ（船河原）、フナダ（舟田）、キタウラ（北浦）、といった水運に関する地名が広がっている（【資料21】）。このうち、アクツ（明津）は、矢上川と江川の合流地点に位置し、現在でも地名が確認できる。『川崎市地名辞典』によると、明津という地名は「悪土」から明津に変化したとされている。フナガワラ（船河原）は、明津と比べて川の上流に位置しており、江戸時代の文化・文政期に編纂された地誌である『新編武蔵国風土記稿』からその地名が確認できる。また、フナダ（舟田）は、船河原よりもさらに上流にある地名で、影向寺が位置

【資料21】 水運にまつわる地名



(明治14年測量地図に加筆)

【資料22】 陸運にまつわる地名



(明治14年測量地図に加筆)

する多摩丘陵の先に位置している。『川崎市地名辞典』で通称としてその地名が確認できる。北浦は、確認できる地名のうち最も北に位置し、多摩丘陵の崖の下にあり、田尾誠敏の研究からその地名の存在が確認できる²²。このように、遺跡周辺に水運にかかわる地名が残っていることから、橋樹官衙遺跡群に供給される瓦

【資料23】 橋樹官衙からみた周辺（奥に多摩川を望む）



をはじめとするモノの流通は水運によって運ばれていたと考えられる。

また陸上交通についても、古代の東海道の駅である小高駅が近くにおかれ、所在地の東側に「コダナカ」、橋樹官衙遺跡の北側に「コダカヤト」が地名として残っている（【資料22】）。さらに影向寺は、多摩丘陵の上に位置しており、その目先には多摩川によって形成された低地が広がっている。周囲との標高差は約30mであり、影向寺の裏からは多摩川や江川、中原街道、キタウラやフナダを望むことができる（【資料23】）。

以上から橋樹官衙遺跡群は、水運・陸運による物流の拠点であることがわかる。影向寺は、こうした水運・陸運の結節点にあったからこそ、郡を越えた信仰の対象になったのではないだろうか。地域情勢を一望できる場所に影向寺が立地しているからこそ、影向寺は単なる一寺院ではなく、地域統合の象徴として機能し、のちにこの地に官衙がおかれたと考える。

Ⅶ. まとめと今後の課題

今回の研究では、法政二高所蔵遺物に影向寺瓦と国分寺瓦との関係を確認し、瓦の流通から古代南武蔵地域における橋樹郡の立ち位置を論じてきた。調査の結果、橋樹郡は、中央政権が離れた位置にある武蔵国および南武蔵を統治するにあたって、重要な役割を担っていたことが分かった。他にも瓦の供給経路については、東海道沿いにある三輪巖嶋神社の三輪瓦窯から瓦が供給されていたことについて、陸路の可能性を考えていたが、今回はその点について十分な検討ができなかった。他の古代寺院との比較調査、古代の河川交通についての調査、中世・近世の瓦の調査については今後の課題としたい。

注

1. 「古代影向寺と武蔵国橋樹地域－所蔵瓦からみる川崎の歴史－」『歴史民俗研究』2025
2025年度第91回日本考古学協会高校生ポスターセッション（2025年5月27日）
2. 川崎市2012、p.172
3. 田中2024、pp.52－53
4. 杉本2018、p.179、仁藤2024、P.71
5. 三輪善之助の論考については杉山2002を参考にした。
（谷川1923 a、pp.14－18、谷川1923 b、pp.12－17。谷川1923 c、pp. 5－11）
6. 坂詰秀一1990、pp.28－35
7. 崔ゴウン 2018、p.43
8. 崔ゴウン 2018、p.42
9. 川崎市 2014、p.131
10. 川崎市 2014、p.133
11. 国分寺教育委員会 2018、
12. 『武蔵国分寺跡資料館だより』No.15号
13. 国分寺教育委員会 2018、pp.38－58
14. 川崎市
15. 竹花宏之 2019、p.190
16. 川崎市 1982、p.36、52－53
17. 三輪南地区遺跡群調査団、1989、p.136
18. 川崎市 2014、p.134
19. 川崎市 2014、p.125
20. 三舟2016・2017
21. 川崎市 1975、p.
22. 田尾誠敏 2024、p.19

【参考文献一覧】

- ・有吉重蔵（編）『古瓦の考古学』ニューサイエンス社、2018年
- ・市古夏生、鈴木健一『新訂江戸名所図会 3』筑摩書房、1996年
- ・川崎市『川崎市史 通史編 1：自然環境 原始 古代・中世』、1993年
- ・川崎市教育委員会『国史跡橋樹官衙遺跡群橋樹郡家跡・影向寺遺跡』川崎市教育委員会、2024年
- ・川崎市教育委員会『川崎市高津区野川影向寺文化財総合調査報告書』川崎市教育委員会、

1982年

- ・川崎市教育委員会『国史跡 橋樹官衙遺跡群 橋樹郡家跡・影向寺遺跡』有限会社協立印刷社、2024年
- ・川崎市教育委員会『橋樹官衙遺跡群の調査』川崎市、2015年
- ・川崎市教育委員会生涯学習部文化財課編集『「国指定史跡 橋樹官衙遺跡跡」を活かす～市民・地域に愛される史跡を目指して～ 記録集』川崎市教育委員会文化財課、2016年
- ・川崎市教育委員会編集『国史跡橋樹官衙遺跡跡整備計』川崎市教育委員会、2019年
- ・川崎市教育委員会編集『国史跡橋樹官衙遺跡群保存活用計画』川崎教育委員会、2018年
- ・栗田一生「武蔵国橋樹郡家と影向寺遺跡」『古代東国の地方官衙と寺院』、山川出版社、2017年
- ・栗田一生「橋樹官衙遺跡群（6）影向寺遺跡－古代の葺・古代影向寺に葺かれた瓦－」
- ・栗田一生「考古学からみた東国（関東地方）の官衙遺跡」『歴史評論』No.895、2024年
- ・国分寺教育委員会『武蔵国分僧寺跡発掘調査報告書』、コモダ印刷、2018年
- ・小谷徳彦「飛鳥における凸面布目平瓦の一事例」『奈良文化財研究所紀要』、2004年
- ・崔ゴウン「古代における瓦の製作道具について～「桶巻作り」による平瓦と丸瓦の復元作業を通して～」『竹中大工道具館研究紀要』第29号、2018
- ・坂詰秀一「歴史考古学史上の川崎」『川崎市史研究 創刊号』、川崎市公文書館、1990年
- ・佐藤信編『古代東国の地方官衙と寺院』山川出版社、2017年
- ・佐藤信『古代の地方官衙と社会』山川出版社、2007年
- ・杉本一樹「正倉院の繊維製品と調庸関係銘文－松嶋順正『正倉院宝物銘文集成』第三編補訂（前編）－」『正倉院紀要』40、2018年
- ・田尾誠敏「古代かながわの官衙と交通」『令和5年度かながわの遺跡展「華ひらく律令の世界」講演会記録』2024年
- ・竹花宏之「南多摩窯跡群の瓦窯」『古代東国の国分寺瓦窯』、高志書院、2019年
- ・谷川磐雄「影向寺発見の古瓦に就いて」『武相研究 第3輯』、1923年
- ・谷川磐雄「影向寺発見の古瓦に就いて」『武相研究 第5輯』、1923年
- ・谷川磐雄「影向寺発見の古瓦に就いて」『武相研究 第7輯』、1923年
- ・仁藤敦史『古代王権と支配構造』吉川弘文館、2012年
- ・仁藤敦史「ミヤケから評家・郡家へ－研究の現状と課題－」『歴史評論 No.895』2024年
- ・原島礼二『日本古代王権の形成』校倉書房、1977年
- ・府中市『新府中史 原始・古代 通史編』、明誠企画出版、2024年
- ・堀川徹「武蔵国造の乱と橋樹ミヤケ：七世紀以前の南武蔵」『史叢』95、2016年

- ・三舟隆之「古代東国の仏教受容と寺院」『古代東国の地方官衙と寺院』、山川出版社、2017年
- ・三舟隆之「影向寺遺跡と古代東国の郡家・寺院」『史叢』95、2016年
- ・村田文夫『川崎・たちばなの古代史—寺院・郡衙・古墳から探る』株式会社 有隣堂、2010年
- ・村田文夫『古代の南武蔵—多摩川流域の考古学』株式会社 有隣堂、1993年
- ・村田文夫『たちばなの古代史—寺院・郡衙・古墳から探る』株式会社 有隣堂、2010年
- ・村田文夫『武蔵国・橘樹官衙遺跡群の古代史—国史跡・橘樹郡衙跡と影向寺遺跡—』かわさき市民アカデミー、2016年
- ・三輪南地区遺跡群調査団『三輪南遺跡群発掘調査報告書』1989
- ・森郁夫『一瓦一説』談交社、2011年
- ・望月一樹「律令制下における橘樹郡の様相」『史叢』95、2016年
- ・行橋市デジタルアーカイブ「行橋市史」
(<https://adeac.jp/yukuhashi-city>) 2024年10月31日閲覧
- ・国立文化財機構所蔵品統合検索システム「重弧文軒平瓦」
(https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/J-37460?locale=ja)
- ・鳩山町「鳩山窯跡ホームページ」
(<https://www.town.hatoyama.saitama.jp/section/yousekigun/ibutsu/kama.html#yushou>) 2024年11月5日閲覧
- ・宮内省書陵部「延喜式34巻」
<https://shoryobu.kunaicho.go.jp/Toshoryo/Detail/1000317050000> 2025年7月7日閲覧
- ・町田市「町田デジタルミュージアム」
(<https://adeac.jp/machida-digital-museum>) 2024年11月3日閲覧

【謝辞】

今回の調査にあたり、以下の方々に様々なことを教えていただきました。お礼申し上げます。

- ・専修大学考古学ゼミ（小林孝秀准教授・ゼミ生・院生の方々）
- ・石井龍太先生（武蔵大学人文学部教授）
- ・川崎市教育委員会文化財課 栗田一生さん・石井一樹さん
- ・法政二高歴史研究部OB 大庭乾一先生
- ・館鼻誠先生（日本体育大学）
- ・西川修一さん（海老名市温故館）